

令和5年度

年次報告書

自己点検・評価委員会

令和5年3月31日

自己点検・評価委員長

清水谷 正尊

I. 令和4年度自己点検・評価委員会の構成員と役割分担

1. 構成員

清水谷 正尊（学長・委員長）
山口 昌澄（副委員長、ALO、学務委員長）
福西 朋子（子ども学科長）
野呂 健一（キャリア育成学科長）
中川 千代（キャリア育成学科介護福祉コース長）
山本 敦子（キャリア支援委員長）
青木 信子（育児文化研究センター長）
中畑 裕之（キャリア研究センター長・外国人留学生支援委員長）
寶來 敬章（入試広報委員長）
生駒 昌之（教学部長）
大橋 一喜（事務局長）
藤山 真宣（総務課長）

2. 各作業部会とその構成員

	作業部会	部会長	担当者		
1	授業評価・見学	山口	野呂	中川	生駒
2	FD・SD	福西	野呂	大橋	
3	卒業生・就職先調査	山本	中畑	山口	眞崎
4	IR (高短生調査含)	野呂	寶來	中川	(清水谷)
			青木	中畑	長倉

3. 各作業部会の業務と今後の課題

(1) 授業評価・見学作業部会

1) 昨年度までの課題

①授業評価アンケート

昨年度前期は、対面での実施呼びかけに関わらず、回答率が61.1%と一昨年度より低下した。

②授業見学

活用を呼び掛けたが、昨年度0件であった。

2) 本年度実績・改善されたこと

①授業評価アンケート

本年度の回答率は前期74.7%・後期66.1%と、昨年度（前期61.1%・後期52.5%）に比べ、それぞれ10ポイント以上向上した。また結果集計（グラフ化）に関し、従来

システムが使用できなくなったため、教務課の協力を得て、新たなシステムを構築することができた。

②授業見学

本年度当初（全体会議）に呼びかけを行ったこともあり、新任教員を中心に3件寄せられた。

3) 新たな課題

①授業評価アンケート

学科・コースにより回答率のギャップが見受けられた。また新システム（AAA）上で実施されたことも影響し、前期において学生が評価を逆につける等、一部混乱も報告された。

②授業見学

昨年度より増加したものの、依然少ない状況といえる。

4) 次年度取り組むべきこと

①授業評価アンケート

実施に際し、教員・学生に対する丁寧な説明を心がけ、回答率の向上に努める。また項目についても、新カリキュラム、各ポリシー等に照らし、内容刷新に向け検討する。

②授業見学

次年度は新たな教員を比較的多く迎える。協力の呼びかけを、年度始めのみならず断続的におこない、新任教員のみならず、現員教員の参加件数の向上を図る。

(2) FD・SD 作業部会

1) 昨年度までの課題

研修後に参加者に対しての振り返り、アンケートはこれまで行っていない。次回の研修テーマ検討の資料とするためにも実施をする。

2) 本年度改善されたこと

本年度の実施内容は以下の通りである。学内において「学生支援」に係る支援方法や内容、学内の支援体制の構築が課題として挙がっていることから、学生支援委員会と連携し研修内容について協議・決定をした。検討事項として、まず開催時期は例年の2月開催から9月開催とした。理由は研修で示唆を得て今年度中に学生支援についての協議を進めたいことからである。また学内教職員に学生支援に係る意識調査を実施し研修内

容検討の資料とすることとした。講師選別にあたっては、高等教育機関等における学生

令和5年度 高田短期大学 FD・SD 研修会

1. 日時：令和5年9月5日（火）13：30～15：30

2. 会場：大講義室（2号館2F）

3. 研修内容

テーマ：大学における障害学生支援について-合理的配慮の理解を中心に-

講師：三重大学 学生総合支援機構 障害学生支援センター 講師

風間 惇希 先生<博士（心理学）、公認心理士・臨床心理士>

支援体制が整備されているところでの支援方法や内容について話していただけることに重点を置いた。また、コロナも落ち着いたこともあり、学外参加可とし実施した。

研修においては、講師の提案もあり、随時研修内容にフロアからweb上で質問を行う方式が取られた。時間の関係で回答できなかった質問については後日、講師からの返答もいただくことができ、学内の今後の取組みに活かすことのできる研修となった。

また、委員会として研修振り返りとともに次年度研修テーマに関する質問含むアンケート実施も行った。研修内容振り返りの回答については学生支援委員会にフィードバックした。

3) 新たな課題

今年度は学内の懸案課題について関連部署と連携して研修を実施した。FD/SD作業部会メンバーのみの協議では行えない内容であったと考えるので、今後の研修会企画においてのあり方としての有効な事例としていきたい。

4) 令和6年度（2024）取り組むべきこと

次年度は、今年度の研修後アンケート結果（次年度の研修内容）を参考にすることと、学外参加可の研修と学内研修は交互に行うことを委員会で共有しているため、この点も踏まえ研修方法・内容を検討することとする。

（3）卒業生・就職先調査作業部会

1) 昨年度までの課題

①卒業生対象調査を継続して実施、データを蓄積する。

②採用先対象調査については、「卒業時に身につけておいてほしい能力（知識・スキル）」（専門的な能力）に特化した内容で調査を行い、結果を分析する。

③卒業生や採用先の情報把握・共有の機会としても活用できるようにする。

2) 今年度取り組んだこと

①卒業生対象調査を継続して実施し、調査内容に関し概ね良好な結果が得られた。前年度と比較して3.8%の回答率の上昇が見られ、Webによるアンケート調査方法は回答促進に効果的であることが伺えた。

②前年度の採用先調査（「採用側が最低限求める専門的な能力とは何か」）の結果と、本学のディプロマポリシーとの関連性を踏まえ、各学科コースの特色に応じた質問項目を新たに作成。卒業生の採用時の学習到達度・獲得能力等（学修成果）の現状について調査を実施した。

③キャリア支援センターの協力により、調査内容の企画、資料作成、回答内容の統計処理作業を円滑に進めることができた。調査の分析結果を学内Webにて公開し、各学科コースや同センター内における卒業生や採用先の情報把握に活用できるようにした。

3) 新たな課題

卒業生対象調査については、本学が平成21（2009）年度文部科学省により採択された「大学推進教育・学生支援推進事業【テーマB】学生支援推進プログラム『キャリアカルテを用いた生涯就職支援システムの構築』」における「就職先意識調査項目」、および本学自己点検・評価委員会「卒業生・就職先調査作業部会」が令和元年度に実施した「卒業時学習到達度・獲得能力等（学修成果）に関するアンケート」における「就職先意識調査項目」をそのまま採用している。その調査の実施と継続は、本学卒業生の学修成果に対する自己評価の現状把握と、本学の教育やキャリア支援等へ活用しうる有益な資料の蓄積に一定の成果を挙げてきた。しかしながら、当調査項目は現在の本学のディプロマポリシーとの関連性を有しておらず、回答は卒業生本人による卒業後の主観的な自己評価によってなされることなどから、調査内容や方法を見直し、整理する必要が生じている。

4) 来年度取り組むべきこと

①卒業生対象調査を発展的に解消する。学修成果の獲得状況については、現行の「DPルーブリック到達度調査」の実施により、その把握、検討を行う。

②今年度新しく設定、実施した採用先調査を次年度以降も継続実行し、ディプロマポリシーとの関連から本学卒業生の進路先での卒業後評価の聴取と分析を行い、学修成果の点検と資料の蓄積につなげていく。

（4）IR作業部会（高短生調査含）

1) 昨年度までの課題

①DP 達成度ルーブリックの改善

オフィスワークコースの専門 DP ルーブリックでは、学生の自己評価が大変低くあった。しかし、ルーブリックの最高レベルが社会人になってから、次のレベルが短大で到達する最高目標、となっており、記述の表現からは、もともと高い評価となるものではなかった。数値化して分析する以上は、他の学科コースの目標レベルも見直して、各段階の目標レベルが揃うよう検討する必要があると思われる。

②成績評価分布結果の担当教員へのフィードバック

成績評価分析結果を教員に返すことで、教員一人ひとりが評価について考える機会となると思うが、現状なされていない。大学評価にも必要となってくる基本的な点検項目であるので、実施体制、結果のフィードバック体制を明確にしてはどうか、検討すべきと思われる。

③高短生調査の検討

令和4年度の調査内容を検討する際、その回答によって学生生活の何に繋がるのかが明確でない質問項目も見受けられた。今の学生の実態と学生生活の実情をしっかりと捉えることができる項目を検討する必要がある。また、年度末はアンケート調査に回答する機会が多いため、他のアンケート調査内容と混乱する学生も一部見られた。

2) 本年度改善されたこと

①DP 達成度ルーブリック調査についての方針の決定

これまで DP 達成度ルーブリック調査の実施時期について、委員会で明確に確定されておらず、年度によっては入学時のデータがない場合もあった。今年度は年度当初の委員会において実施時期を検討し、経時的変化を分析する必要から入学時、1年後期終了時、2年後期終了時の3回実施することを決定した。

②DP 達成度ルーブリック調査回答率向上への取り組み

本調査に限らず、回答率を向上させることがデータの信頼性には不可欠である。今年度は、入学時には、スタートアップゼミナールにおいて回答を呼び掛け、1年後期、2年後期は、成績交付時に回答させることとした。今年度更新された教務システムでは、アンケートへの回答状況がリアルタイムで確認できるため、回答数が少ない場合には、その場で回答を促すことができることも回答率向上につながった。

③授業科目間の成績評価基準の平準化に向けた取り組み

今年度は成績評価分析結果を委員会で報告した後、次の教授会でも報告することとした。それによって、各教員が他の教員と比較して自分の評価の妥当性について考える機会を提供することができた。

④高短生調査質問事項の検討

授業評価アンケートと重複する部分があったため、本調査では学生生活を問うことを中心に、作業部会において質問事項を協議・検討した。さらに委員会でも検討後、全学生対象に成績交付日に調査を実施することとなった。調査結果はこれまでと同様に、次年度4月以降に集計を持って作業部会で分析し、結果を委員会に報告する。その後公表する予定である。

3) 新たな課題

①DP 達成度ルーブリックの改善

昨年度までの課題に挙げた、オフィスワークコースの専門 DP ルーブリックについて、今年度実施した入学生対象の調査では、卒業時ほど大きな差はなかったものの、一部の項目で自己評価の低い傾向が見られた。他学科・コースとの比較が可能となるように検討する必要がある。また、共通 DP ルーブリックについて、以前から一部の項目で表現が難解であるとの指摘があり、検討が望まれる。

②他の調査も合わせた高短生調査の検討

学生がアンケートに回答する機会が多い。丁寧な回答を求めるのであれば、類似した内容を削除したり統合したりして、アンケートを必要最小限にまとめることを検討する必要がある。

4) 次年度取り組むべきこと

①授業科目間の成績評価基準の平準化に向けたさらなる取り組み

今年度は教授会において成績評価分析結果を報告したが、次は、非常勤教員も含めた平準化に向けた取り組みを検討する必要がある。

②DP 達成度ルーブリックの改善

次年度はまず、オフィスワークコースの DP ルーブリックについて具体的な記述語の検討に着手したい。コースからの素案に基づき、作業部会で検討し、令和7年度入学生からのルーブリック調査から実施したい。また、共通 DP ルーブリックについては、各委員からの意見を聴取するところから始めたい。

③高短生調査の結果を踏まえた見直しの検討

調査結果から学生が何に満足し何に改善を求めているのかを明らかにし、具体的に分析する。また、その回答結果から、さらに質問項目の見直しの必要性が見えたら引き続き検討していきたい。